論　文

幼稚園教諭養成課程における「領域に関する専門的事項」に求められる授業内容の検討
－「幼児と表現」のモデルカリキュラムを手がかりに－

金　奎道（高知大学教育学部）

A Study on Teaching Contents Required for “Specialties Related to the Domains” in Kindergarten Teacher Training Course: Based on Model Curriculum of “Children and Expression”

KIM Gyudo
Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

The Department of Early Childhood Education in Kochi University is planning to cultivate kindergarten teachers equipped with practical leadership through the high-quality teacher training course by newly establishing the “Children and Music Expression” as a course related to “Specialties Related to the Domains” from 2022.

As concrete teaching contents of “Children and Music Expression” based on the new teacher training course, this study aims to suggest the music expression activities (minimizing mutual contacts) that are practicable in classrooms even under the Corona pandemic. The author visited the Kindergarten affiliated with the Faculty of Education multiple times from June to July 2020, and then multilaterally observed the children’s play and living in the kindergarten in the perspective of ten goals which children are expected to achieve by the end of childhood, so-called 10 sugata, in kindergarten curriculum. There were many limitations (For example, avoidance of singing and wind instruments in classrooms) due to the influence of the COVID-19, so the children were not sufficiently provided with music expression activities.

In this circumstance, the appreciation activities that could be performed in a certain distance between children would be useful such as physical expression using Non-locomotor rhythmic movement or cup song for learning a sense of rhythm in their seats. In the results of practicing the course related to early childhood education based on the model curriculum, it would be helpful for the students of teacher training course to learn the specialized contents and teaching methods related to young children’s expression.

Keywords: Specialties Related to the Domains, Children and Expression, Teacher Training Course

Ⅰ．序論

１．問題の所在

中央教育審議会答申（第 184 号）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」（平成 27 年 12 月）において、これからの時代の教員に求められる資質能力として、（1）教員としての不易とされる資質能力、（2）新たな課題に対応できる力、（3）組織的・協働的に諸問題を解決する力の３つの視点を明らかにして、教員の養成・採用・研修を通じた取り組みを提案している[1)]。

これを受け、平成 28 年 11 月に、大学等の創意工夫により質の高い教職課程を編成することができるようにするため、教育職員免許法の一部改正がおこなわれた。さらに、新しい教職課程の編成のための「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」が設置され、教職課程にて共通に修得すべき資質能力を明確化した（平成 29 年 10 月）教職課程コアカリキュラムが策定された[2)]。

新しい教職課程では、幼稚園教諭免許状において、従来の「教科に関する科目」（一種６単位、二種４単位）と教職に関する科目のうち、「教育課程及び指導法に関する科目」（一種 18 単位、二種 12 単位）を「イ 領域に関する専門的事項」と「ロ 保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」に関する科目（一種 16 単位、二種 12 単位）へと変更することで、実践的指導力のある幼稚園教員を育成するための質の高い教職課程を目指すこととなる。この「領域に関する専門的事項」は「領域それぞれの学問的な背景や基盤となる考え方を学ぶこと」を意味し、「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」は「領域のねらいや内容を踏まえた上で、領域ごとの保育内容の指導法で実践すべき力を身に付けること」を目的に設定されている[3)]。

そして、それぞれの領域論と指導法の連携を図りつつ「どのような幼稚園教諭を育てるか」、「どのような学問的基盤や幼児教育に関わる専門性をもった教員がいるか」を目指したモデルカリキュラムが提示されている。モデルカリキュラムは教職課程コアカリキュラムを踏まえながら、この「イ 領域に関する専門的事項」と「ロ 保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」について領域別に作成され、５領域の着実な実践力をもった幼稚園教諭を養成することを目指している。今後、幼稚園教諭養成課程を編成するにあたって独自性や自主性が発揮できる科目として期待される。

これに伴い、本学の幼児教育コースでは幼稚園教諭養成課程のカリキュラムの再編に向けて（経過措置を経て）2022 年度より「領域に関する専門的事項」の科目として、「幼児と言葉」「幼児と人間関係」「幼児と環境」「幼児と健康」の各領域を１単位ずつ、さらに領域「表現」に関わる子どもの表現活動として「幼児と表現（音楽）」と「幼児と表現（造形）」「幼児と表現（身体）」を新たに設置し、それぞれ１単位ずつとしている。いずれも５領域をバランスよく扱いながら、質の高い教職課程カリキュラムの実現を検討している。

表１　教職課程コアカリキュラムに基づいた幼稚園教諭養成課程のカリキュラムマップ（一部）

領域及び保育内容の指導法に関する科目	領域に関する専門的事項	幼児と言葉	幼児と環境
		幼児と人間関係	幼児と表現（音楽）
		幼児と健康	幼児と表現（造形）
			幼児と表現（身体）
	保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）		

このように、「領域に関する専門的事項」では各領域のバランスを考慮し、「幼児と○○」のように幼児を意識した新しい教職課程として位置づけ、実践力・指導力のある教員の育成を目指している。そこで本稿では、高知大学教育学部において新設される「幼児と表現（音楽）」の授業内容を検討することによって、幼児教育コースのカリキュラム開発に一助したいと考えた。

２．先行研究の検討

平成 29 年告示の幼稚園教育要領改訂に伴い、幼稚園教員養成機関では新しい教職課程におけるモデルカリキュラムに基づいた授業内容の検討が行われつつある。

例えば、現行の授業内容とモデルカリキュラムを比較検討し、「幼児と健康」と「保育内容『健康』の指導法」の現状と課題を明らかにしたり（入江ほか、2018）[4)]、「幼児と環境」の内容構成を構想するために保育実践事例や関連専門分野（教育心理学、数学教育学等）の知見をもとに考察したり（藤田ほか、2020）[5)]、領域「言葉」の「保育内容の指導法」のモデルカリキュラム及び新幼稚園教育要領の記載内容に照らして検討したりしながら授業内容の検討を行っている[6)]。さらに、モデルカリキュラムと授業モデルまでを対象として、「領域に関する専門的事項」に求められる授業内容とその射程について検討した論文がある（中川ほか、2018）[7)]。

またＮ教育大学教育課程においては、新設される「領域及び保育内容の指導法に関する科目」で扱う内容を定め、５領域ごとの内容構成を提示したものがある。ここでは、各領域のねらい及び内容に沿った専門的知見を述べ、それらを背景とする新しい科目のシラバス構成を試みている[8)]。

これらはいずれも、文部科学省の委託事業として行われた保育教諭養成課程研究会の「幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究」の報告書、並びに『幼稚園教諭養成課

程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～』を手掛かりに作成していることがわかる。しかも「領域に関する専門的事項」に含まれる具体的な内容については、モデルカリキュラムをそのまま取り入れる必要はなく、養成校の実情や実態に合わせて創意工夫する必要があるが、上記の先行事例はそうした独自性が見られる教職課程とは言い難いところがある。

以上のことをまとめると、幼稚園教諭養成課程において新教職課程への対応は喫緊の課題であることは推察される。それぞれの養成校では、質の高い教員養成やシラバスの作成に向けて独自性を発揮しながら、創意工夫した体系的なカリキュラムを編成しているが、幼稚園教育要領やモデルカリキュラムの解説に留まらず、具体的な授業計画を構想することで共通的に修得すべき教育内容が明確となろう。

特に、新型コロナウイルスの感染が拡大し（2020 年７月現在）子どもを取り巻く環境が大きく変動している昨今の状況下では、幼稚園の室内遊びや外遊びなど、様々な側面に影響を及ぼしている。どのような状況下になっても、子どもが安心して体を動かしながら楽しく活動できる「表現と音楽」をコロナ禍の今だからこそ考えるべきではないだろうか。

３．研究の目的と方法

そこで本研究では、幼稚園教育要領改訂の趣旨を理解し、具体的な子どもの姿を想定した授業構想のために子どもの園生活を「幼児期の終わりまで育ってほしい姿」の観点から分析し、「幼児と表現（音楽）」に求められる指導方法および授業内容を検討していく。つまり、新しい教職課程に基づいて設置される「領域に関する専門的事項」の授業内容、とりわけ創意工夫ある質の高い教員養成課程科目としての「幼児と表現（音楽）」において取り扱うべき内容を検討することである。

研究の方法は、はじめに 2020 年６月～７月まで数回にわたって附属幼稚園を訪ね、子どもたちの園生活や遊び、環境との関わりに注目し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に照らし合わせて、教師が指導を行う際に考慮すべきことをまとめる。つぎに、新型コロナウイルス感染症への対応について、幼稚園等における新しい生活スタイルが求められる昨今の状況を鑑み、具体的な保育場面を想定し、創意工夫ある授業を構想する。

Ⅱ　幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を捉えた実践事例

１．10 の姿に示すねらい及び内容

なぜ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に注目するのか。幼稚園教育要領によると、10 の姿は「第２章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するもの」[9] とされる。したがって、保育者は「表現」領域と直接のつながる「豊かな感性と表現」のみを意識するのではなく、子どもの成長の過程において豊かな教育活動が展開できるようサポートする必要がある。なぜなら、10 の姿は子どもにどのような経験を保証できているかを明確にし、行うべき保育の方向性を示す事柄であり、それらを個別に取り出して指導することはあまり望ましくないからである。

たとえば、幼児教育における表現活動を 10 の姿に着目し、幼児の自由遊びの観察を通して楽しく表現する幼児の育成を目指した実践研究がある。

10 の姿の「豊かな感性と表現」に関わる５歳児を実践対象とした研究では、具体的な５歳児の姿と「心を動かし楽しく表現する幼児」につながる要因を整理・分析した。そこには、興味関心を広げ、受け止めたり手伝ったりする教師の存在、イメージしたことを楽しく共感できる仲間の存在があること、これらが幼児の活動を支える要因であることを示している[10]。

また、認定保育園と認可外保育園の２つの園で観察される保育実践事例を 10 の姿の出現を焦点化して分析した研究では、それぞれの園において前者は「豊かな感性と表現」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」が顕著であり、後者は、「健康な心と体」や「自然との関わり・生命尊重」が多く観察されることを明らかにしている。ここでは、園庭での見立て遊びと実体験に即した生活等、それぞれの環境と 10 の姿との関わりを意識すると、展開される保育活動や遊びが異なってくると予想している[11]。

井口眞美（2020）[12] は、10 の姿が保育の質向上に活かすためには、①子どものエピソード記録を蓄積すること、②子どもの育ちの経緯を縦断的に記録していくこと、③保育士同士の保育カンファレンスを活用し自分の保育行為をメタ化し内省すること、などが必要であり 10 の姿は到達目標ではなく、子どもの姿を見取る視点があることを再確認している。

幼稚園教育において育てたい資質・能力は活動全体によって育むものであるため、10 の姿を意識しながら子どもの成長を促す必要があろう。小学校教育への滑らかな移行が行われるよう、子どもが園生活において様々な体験をし、ヒトやモノと関わるよう、教師が指導を行う際に考慮すべき事柄となる。

こうしたことを踏まえ本論では、高知大学教育学部に新設される保育内容５領域に関する科目（「幼児と健康」「幼児と言葉」「幼児と人間関係」「幼児と環境」「幼児と表現」）のうち、「幼児と表現」の授業内容の検討を目指し、附属幼稚園の幼児の遊びや園生活を１０の姿から見てみる。しかし幼児の表現は、直接的で素朴な形で行われることも多

く、必ずしも明確な目的や意図をもった状態で表れるとは限らない。幼児が何を感じ、どのように考え、どのように表現しようとしているのか、また、なぜそのように表現しようとしたのかといった、表現に至るまでの経験のプロセス全体を把握し、表現の意味を理解[3]しなければならない。

２．子どもの遊びと園生活

高知大学教育学部附属幼稚園（以下、附属幼稚園）の３歳～５歳児を対象に、2020 年６月～７月までの数回に渡って幼稚園を訪ね、子どもの遊びと園生活を検討することを目的に参与観察をおこなった。

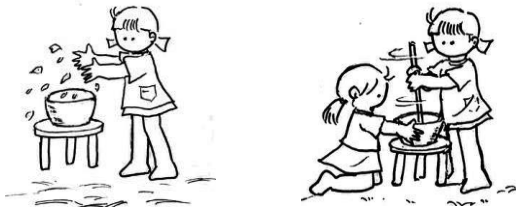
新型コロナウイルス感染拡大を受け、臨時休園が続いていた附属幼稚園では、地域の感染状況を踏まえて、５月 25 日から通常登園が始まった。この時期は、新しい生活様式を実践することが求められ、子どもたちにとっても今までの園生活とは大きく異なることが予想された。例えば基本的感染対策のため間隔をあけて着席し、マスクの着用や手洗いの励行を心がけていることが見受けられた。しかし、子どもたちの外遊びの時はマスクを外して走りまわったり友達と近距離で話し合ったりするなど、普段とあまり変わらない様子が見受けられたため複雑な気持ちとなった。

下記のエピソードは、実際幼稚園児を訪ね子ども遊びや園生活を観察した内容である。ここでは、10 の姿を手掛かりにそれぞれの活動を概観する。

エピソード１　色水冷蔵庫　４歳児クラス（６月 22 日）

年中組教室の前には色水冷蔵庫コーナーが設けられている。女の子4～5人がそれぞれ好きな草や花びらをすり鉢に入れ、棒で花をすりつぶしている。すり鉢に水を加え、ビニール袋に移したら手でもみ始める。液体をこして牛乳パックらしき容器に移し入れ、冷蔵庫コーナーに綺麗に並べている。「これはレモンジュース」「これはブルーベリージュース」といいながら。「これって飲めるの？」と観察者が意地の悪い質問をしたら、A 子から「飲めるような･･･」と（小さい声で）返事された。

その時、隣でその様子を見ていた B 子に声を掛けられた。「これ（ビニール袋の下部を手で叩きながら）聞いてみて、音がするの」、「何の音？」と聞いたら、B 子は「ゼリー音」と答える。観察者は「ゼリー音？」とオウム返し風に聞き返してしまった。観察者は考えを改め、「ちゃぷちゃぷ？」「ぷちゃぷちゃ？」と擬音語で表してみた。そしたら、B 子は身体を揺すりながら「ぷちゃぷちゃ」と答えた。



上記の色水冷蔵庫コーナーで、子どもたちは花びらや草という素材と関わりながら、さまざまな色の変化を楽しむ。黄色の水はレモンジュース、青い水はブルーベリージュースの如く、これまでの経験を拠りどころとして本物のジュースに見立てて遊ぶ。その中で B 子は、音などに興味を示しながら遊びに取り組む姿が見られる。ビニール袋で音を立ててみたりゼリーになりきって身体を揺さぶる仕草を見せたり自分が気付いたことや感じたことを、動きや言葉を用いて人に伝えている。

以上の事例から、「豊かな感性と表現」「協同性」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」の要素が見受けられる。大半の子どもたちは、素材による色の変化に興味・関心をもって取り組んでいるなか、B 子はビニールと水という素材の特徴に注目し、気付いたことや感じたことを自分で表現したり観察者に伝えたりする。そして、水の音を適切な擬音語で表すまでの筆者とのやり取りが興味深い。

エピソード２　砂遊び　４歳児クラス（６月 29 日）

子どもたちは、砂場の棚にある遊具や道具を使って、（砂や水による汚れなどは気にせず）夢中になって何かを作っている。C 子は、（冷やすため？）棚に入れてあった砂の塊を鍋に移しながら観察者に話しかけてくれた。「（水を少しずつ加えながら混ぜる）こうやって溶かすの。溶かすのはねえ、塊をつぶすってこと」、聞いてもいないことまで親切に言葉の意味を説明してくれた。「こうやってフワフワになるの」「ねえ、触ってみて」と勧められた。指で触ってみて、「本当だ、フワフワだ」と言ってあげると嬉しそうな顔でまた作業を続ける。

暫くして、泥水を入れたコップを C 子から渡された。「はい、どうぞ。コーヒーです。」といいながら。観察者は「ありがとう、（飲む真似をしてから）美味しい」とお礼を言った。

隣の D 子は泥を型に入れてひっくり返してチョコレートをつくり、E 子は皿に泥を綺麗に盛り付けながらワッフルをつくっていた。

子どもたちが泥でつくるチョコレートやワッフルの制作工程をみると、全員、砂と水の調合にこだわりをもって取り組んでいることがわかる。自分たちがつくりたいモノへの確かなイメージをもって、その特徴に近づけるため、試行錯誤を重ねながら砂と水を交互に混ぜる。そして、自

ら手を加え、形を変えることによって出来上がるモノに喜ぶ。

こうしたこだわりは、「ひとつのことを極めて、成し遂げていくプロセス」[14] として働くため、子どもにとっても決してマイナスではない。特にC子はつくる過程を楽しみながら、豊かな言葉で丁寧に自分のこだわりを説明しくれた。

以上の事例から、「協同性」「豊かな感性と表現」「言葉による伝え合い」などの要素が見受けられる。C子は、自分が経験したことや感じたことを、手順に沿って確かな言葉の力をもって具体的に伝えようとする。D子とE子は、自分たちがつくり出すモノにチョコレートやワッフル等の名前を付けるが、それは水分量と形からイメージしたものであり、観察者に「なるほど」と思わせるところがある。

エピソード３　虫取り　３歳児クラス（７月１日）

夏に近づくと子どもたちは虫取りで夢中になる。K太とS太は虫かごと虫取り網をもってグラウンドを走り回っている。K太は蝶やトンボをねらって網を振り回すが、なかなか捕まえられない。クラスでも一回り大きい S 太は既にバッタやアゲハ蝶などを捕まえっている。隣にいた観察者は、K 太に声をかけてみた。「おじさんが、捕まえてあげようか？」と言うと、すぐ網を渡され、何回かの空振りのすえ運よくとんぼを捕獲することができた。「やった!」と二人から歓喜の声があがった。「じゃ、どうする？」観察者はK太に問い掛けてみた。

躊躇しながら K 太は、網の上から虫を触るが（とんぼの思わぬ動きにびっくりして）直ぐ離してしまう。触って離すことを繰り返すだけで、網の中に手を入れて虫かごへ移すことができなかった。それを見ていたS太はK太に「こうやって入れても良いんだよと」と言いながら、虫かごに網を被せて、虫を触らず入れるコツを教えた。K 太は納得した顔をして、飛んでいるチョウを追いながら仲良く二人で走り去って行った。

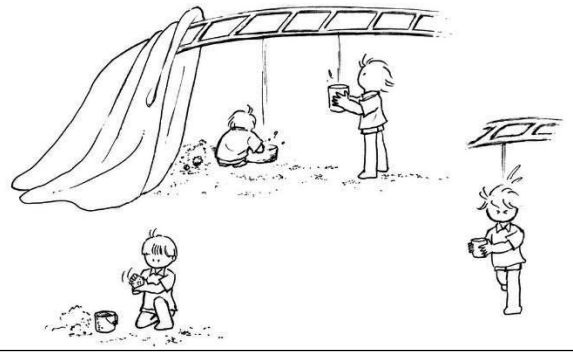
夏になると、虫取りは日々の子どもたちの遊びの中で欠かせない楽しみである。草をかき分け、ダンゴ虫を手に取って喜ぶ子どもたちがいる。観察者は、虫取り網と籠をもって園庭を走り回る子どもたちを見守るつもりでついていたが、高いところに止まっている蝶やとんぼは簡単には捕まらない。しかも子どもたちの動きには敏感に反応するため、近づいても直ぐ逃げてしまう。

K太は、素手で土を掘ってダンゴ虫を触る友達ほどには虫が好きではないように思われる。でも、グラウンドを駆け回りながらS太と一緒におこなう昆虫採集には興味があるようだ。次回からは自分で籠に虫を入れることができるだろうか。

以上の事例から、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿のうち、「自然との関わり・生命尊重」「自立心」「健康な心と体」などの要素が見られる。S太とK太は園庭を元気に走り回って捕まえた昆虫（トンボやチョウ）を大事に持ち帰って、教室前にそっと置いた。これからも荒く扱わず、命あるものを大切にする気持ちをもち続けることを祈ってみた。

エピソード４　噴水遊び　３歳児（７月２日）

3歳児クラスの前には面白い遊具が設置されている。穴を開けた塩ビパイプをうんていの頂上に固定し、それにウォーターホースを繋げたものは、まるで上から降る噴水のようだ。その下には子どもだかりとなり、それぞれバケツやスコップで水遊びを楽しむ。水が勢いよく出る場所は子どもたちのもめ事が起きたりする。H 子が横の砂場から砂を持ってきて遊ぶと、ほかの友達もバケツに砂を入れて噴水まで持ち運んだり、逆に水を砂場へ持っていき砂山を作ったりする。みんな噴水と砂場を行ったり来たりする中で、I 子だけは同じ場所にじっと座って砂と水を混ぜながら何かを作っている。Y 保育者は「何を作っているの？」と聞いてみる。I 子は、「これ、ビタミン C なの」と答える。しばらく経ってから、「出来た？」と尋ねると、I 子は「出来た。はい、どうぞ」と Y 保育者にビタミンCを渡す。



子どもの遊びにおいて、砂と水を混ぜる様子はよく見られるが、エピソード４のように水遊びと泥遊びが一体となることは珍しい。子どもたちは、水を混ぜているうちに偶然にできた砂の感触に喚起されて様々なイメージが生まれてくることもある（無藤ほか、2018）。雲梯と砂場を行ったり来たりしながら水や砂を運び、自分にとってのちょうどいい砂と水の調合を探している姿が見受けられる。I 子は砂による水の濁りから黄色のビタミン C をイメージ

しているようだ。保育者は子どもたちの遊びにはあまり介入しないが、水の勢いが強いところでは時々言い合う声が聞こえる。保育者はこうした子どもたちのいざこざを仲裁するため、じっと傍にて子どもたちを見守る。

以上の事例からは、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿のうち、「健康な心と体」「思考力の芽生え」「社会生活との関わり」などの要素が確認できる。水が流れる雲梯は子どもの大好きな遊び場であるため、いつも大勢が集まり、夢中になって遊ぶ姿が見受けられる。保育者にとっても子ども理解の様々な視点が得られる学びの場であるかもしれない。

３．分析結果

子どもの遊びと園生活を見取るため参与観察を行ったのは 2020 年６月～７月の間である。この時期は、新型コロナウイルス感染拡大を防ぐために、全国すべての小中高校と特別支援学校について、３月２日から春休みに入るまで臨時休校の措置がとられていた。

ここでは、10 の姿の観点から捉えた実践事例をまとめる前に、附属幼稚園の状況について特筆する。本来ならば、ここに挙げている４つの事例について、10 の姿がどのように日頃の保育の中で表れ、幼稚園教諭がそれをどう意識しているのかを聞き取り調査を実施する必要があるが、時期が時期だけにそうした調査は自粛せざるを得なかった。

臨時休校は多くの保育園や幼稚園等にも影響を与え、附属幼稚園では５月 25 日から通常登園が始まったという。地域によって差はあるが、大阪市のある幼稚園では、２月末の遊戯会を無観客で実施したり、３月の卒園式もぶっつけ本番で、保護者席をつくらない（介添え役は保護者一人と限定）無観客に近い状態で式を開催したりするなど、様々な混乱状態に陥ったようである[15]。

附属幼稚園の周辺地域では、感染状況が落ち着いており、通常保育が行われていたことは幸いである。ただ、子どもたちの園生活は、従来の通常保育とは異なることが多々あった。たとえば、（参与観察期間中）子どもたちはほぼ全員マスクを着用しており、大声で歌う歌唱活動などは控えていた。おそらく社会情勢を鑑みて、こうした活動は感染リスクが高いと言われているからであろう。その一方で、クラス活動に比べ、外遊びをしている時はマスクを外す子どもの姿が目立った。副園長によれば、登園時は全員マスクを着用するが、時間が経つにつれ（息苦しさで）徐々にマスクを外す子もいるという。それに対して保育者から子どもにマスク着用を無理強いはしなかった。とはいえ、マスクの着用や手洗いの励行は、子どもも大人も神経をとがらせていることが見て取れた。

エピソードの分析より、子どもにとって密にならないよう他者との距離を確保することや会話を控えながら遊ぶことはなかなか難しいと考えられる。とくに外遊びでは、人との間隔なんか気にせず自分の世界に没頭する子どもの姿が見受けられる。上記に取り上げた４つのエピソードを通して普段とは変わらない子どもの園生活の実際を垣間見ることができた。

「幼児と表現（音楽）」の授業内容構成を目的とする本稿では、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の視点から、先ずは子どもの外遊びや園生活に注目した保育実践事例を見直し、「豊かな感性と表現」を支える保育士の働きかけを考察する。その後、昨今の状況では室内の音楽表現活動が不足していることを鑑み、子どもの「豊かな感性と表現」を育成する音楽表現活動を提案することで「幼児と表現（音楽）」の授業構成への示唆を与える。

「豊かな感性と表現」とは、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。」[16] と示されている。

例えばエピソード①では、草や花びらから色水を抽出する遊びの中で、水の入ったビニール袋の音に注目したＢ子の豊かな感性と擬音語での表現に至るまでの保育者による言葉かけの大切さが実感できた。エピソード②では、砂や水を用いて自分たちがイメージしたモノをつくるとき、素材の特徴を生かしながら一緒に作ったり考えたりする姿が見られた。筆者は、子どもの話に耳を傾け根気よく聞くことしかできなかったが、ふり返ってみると、保育者が子どもの話をしっかり聞くことで、彼らの気分や興味関心を理解することができると改めて気づいた。エピソード③では、園庭で虫取りを楽しむＫ太とＳ太の間で子どもの成長・発達を実感できる場面があった。虫の捕獲を丁寧に説明してあげるＳ太とそれに納得し安堵するＫ太の間には学び合う姿が見て取れた。エピソード④では、水や砂に触れてその感触を楽しみつつ、様々な道具を用いて遊ぶ子どもの姿があった。保育士は子ども同士の言い合いに少し仲裁するだけで、始終見守る保育を実践していた。

以上のように、子どもの遊びや園生活を 10 の姿の視点より分析してみた。エピソードからもわかるように、外遊びの様々な場面にて 10 の姿の要素が確認でき、子どもの姿を多角的に見取ることができた。また保育者は、10 の姿は単一であらわになるのでなく複数の要素が重なり合って表出されるということ、それは到達目標ではなく子ども理解のための手段であることを忘れてはならない。これらは、保育の質の向上につながる材料となるに違いない。

10 の姿の利用と課題についての保育士アンケート調査（41 名対象）[17] によると、「日々の保育を行う上で、『10 の姿』を意識し、活用していますか」に対して、できるだけ意識するようにしているが 59%を示し、また「保育計画の記入用紙には『10 の姿』が設けられていますか」に対し

ては、設けてある（42%）より、特に設けていない（56%）の方が多い。要するに、10の姿の活用にあたり、それぞれの項目についての理解がまだ不十分であることを報告している。10の姿は幼児期の終わりまでの具体的な姿であることを意識し、教師が指導を行う際に十分考慮されることが望ましいだろう。

「豊かな感性と表現」に関する領域である「表現」では「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことを目指している。子どもたちが感じたことや考えたことを自分なりに表現できるよう、指導の方法や方向性を考えていく必要がある。

Ⅲ　モデルカリキュラムに基づく「幼児と表現（音楽）」の授業構成

上記に見てきた 10 の姿は、子どもの幼稚園での外遊びだけでなく室内遊びにおいても子どもの成長・発達の支えとなるため、教育活動の充実が求められる。勿論「豊かな感性と表現」は「表現」領域のみにて育まれるのではなく、遊びを通しての総合的な指導から育まれる[18]ものであるが、表現活動において様々な制約や制限がある昨今の状況を鑑み、３密を避けてもできる子どもの音楽表現活動を提案することが急務であると考えた。以下に、「幼児と表現（音楽）」における授業構成に視点として、モデルカリキュラムに立脚しつつ子どもが興味や関心を引き出すことができる室内の音楽表現活動を提案する。

領域に関する専門的事項のモデルカリキュラムは、教職課程コアカリキュラムで示されるものを踏まえて、さらに領域別に、幼稚園教育の特質を踏まえながら作成されていること、〔留意事項〕や考えられる〈授業モデル〉が示されているので、大学等で授業を具体的に構想したり、シラバスを作成したりする際、参考となる[19]。モデルカリキュラムは、一種の教育内容のモデルであり幼稚園教諭養成課程での活用が期待できる。ここでは、「幼児と表現（１単位）」のモデルカリキュラムの全体像を概観した上で、室内で実践可能な子どもの音楽表現活動を提案し、「豊かな感性と表現」につながる「幼児と表現（音楽）」の授業構成を考える。

モデルカリキュラムは、修得すべき資質能力を表す「全体目標」、それを細分化した「一般目標」、そして具体的で明確な目標を表す「到達目標」とで構成されている。とりわけ、考えられる〈授業モデル〉は、地域や大学等の特性、担当教員による専門性等を加えて、それぞれの実態を踏まえた授業運営が可能となるので、それをそのまま取り入れる必要はないだろう。

１．「幼児と表現」のモデルカリキュラム

モデルカリキュラム「幼児と表現」の全体目標は「領域『表現』の指導に関する、幼児の表現の姿やその発達及びそれを促す要因、幼児の感性や創造性を豊かにする様々な表現遊びや環境の構成などの専門的事項についての知識・技能、表現力を身に付ける」と設定されている。そして、（１）幼児の感性と表現に関する一般目標として「幼児の表現の姿や、その発達を理解する」を挙げている。その到達目標としては、１）幼児の遊びや生活における領域「表現」の位置付けについて説明できる、２）表現を生成する過程について理解している、３）幼児の素朴な表現を見出し、受け止め、共感することができる[20]、と示されている。

尾崎らは、これらの目標を意識することによって、幼児の表現を豊かに導く環境の整備や教材の準備、子どもの意欲を引き出す言葉掛けが期待できる[21]と述べている。確かに、一般目標と到達目標を踏まえ、保育者に求められる専門的な知識及び技能が修得できるよう教員養成系の基礎内容を構想する必要があろう。

また、（２）様々な表現における基礎的な内容の一般目標としては、「身体・造形・音楽表現などの様々な表現の基礎的な知識・技能を学ぶことを通し、幼児の表現を支えるための感性を豊かにする」を挙げている。その５つの到達目標は、以下に示す通りである。１）様々な表現を感じる・みる・聴く・楽しむことを通してイメージを豊かにすることができる。２）身の回りのものを身体の諸感覚で捉え、素材の特性を生かした表現ができる。３）表現することの楽しさを実感するとともに、楽しさを生み出す要因について分析することができる。４）協働して表現することを通し、他者の表現を受け止め共感し、より豊かな表現につなげていくことができる。５）様々な表現の基礎的な知識技能を生かし、幼児の表現活動に展開させることができる、と示されている。

保育者は歌を歌う、楽器を弾く、音楽を聴く、身体を動かす等を通して幼児の表現活動を支えるが、そうした基礎的な知識技能や実践的指導力は子ども理解を基盤として成り立つ。つまり、一般目標に示される「幼児の表現を支えるための感性を豊かにする」ことが保育者養成に最も必要な事項であり、子どもの成長や発達を支援につながる礎であろう。

２．「幼児と表現（音楽）」の授業づくり

周知のとおり、新型コロナウイルスはこれまで学校に当たり前にあった音楽授業のありさまを一気に変えてしまった。例えば、歌唱器楽やリコーダー等の管楽器を用いる活動、身体の接触を伴う活動は行わない[22]等は記憶に新しい。幼稚園においても、幼児が歌を歌う際にはできる限り一人一人の間隔を空け、人がいる方向に口が向かないようにすること[23]が、留意すべき事項として示されている。筆者の幼稚園の観察期間中においても、子どもが歌ったり楽

器を演奏したりすることは殆ど見受けられず、プール遊びの前に体を動かしながら歌うくらいで、音楽活動そのものが萎縮していることは否定しきれなかった。そこで、様々な制約や制限下において、教室でも実践可能な創意工夫ある具体的な授業内容を構想し、保育者養成に求められる資質能力の向上を図る。

（1）非移動系の動きを取り入れた鑑賞活動[24]

ヴィヴァルディ作曲の「四季」から〈春〉を取り上げる。〈春〉はA～Gのソネット（イタリア語の原詩）に基づいてつくられている。まずは、音楽を聴きながら①から⑤までの動きを子どもが真似るよう指導する。

① A では、保育者が子どもに手本を見せ、膝の叩き方を説明する。強弱の変化によって膝を強く叩いたり弱く叩いたりすることによって、強弱の変化を知覚する。② B では、腕をバタバタして小鳥の羽ばたきを真似する。「鳥が飛んでいるとき、どのような音が聞こえた？」等を問いかける。③ 再び登場する A では、①と同じく膝打ちをする。④ C では、泉が優しくささやき流れていくことを表現するため、手をくねくねさせたり腕で水の流れを表したりする。保育者は、「泉が流れるとき、音楽は速いか遅いか、それは大きな音か、柔らかい音か」など音楽を諸感覚で捉えるよう促す。⑤ A では、再び①の動作を繰り返す。

⑥ D のソネット「黒雲と稲妻が空を走り、雷鳴は春が来たことを告げる」の部分を聴き、その曲想に相応しい動きを班に分かれて考えさせる。そして班で考えた動作を発表し合う、という学習プロセスである。実際、これを2020年教員免許状更新講習にておこなったところ、あるグループでは一人が黒雲（黒い上着を頭に被る）になりきって人々を追いかけ、追いかけられた人は小走りに急ぐ姿を表現していた。また、あるグループでは雷神になりきって雷が落ちることを表し、他の人が逃げ回ることを表現していた。

上記の活動は、音楽をより一層楽しめるよう身体表現活動への発展を意図したものである。ルンとラインバーグ（Loong & Lineburgh）[25]の研究によると、非移動系の動き（Non-locomotor movements）が幼児の音楽表現活動に適しているという。それは、幼児期の子どもは動作に関連する語彙が豊かでないため、まずは保育者の動きを模倣することから始まる。座ったまま膝打ちをしたり腕を動かしたりする非移動系のシンプルで楽しい動きを取り入れる。そして、保育者は楽曲分析のうえ、曲想の変化と音楽の構造に相応しい動き（小さな動きと大きな動きなど）を考えねばならない。

子どもは、モデルカリキュラムの（2）の4）のように「協働して表現することを通し、他者の表現を受け止め共感し」様々な動きに対する質感を探求していき、より豊かな表現につなげていくことができる。

（2）楽しいカップス・パフォーマンス

アメリカで人気の映画（Pitch Perfect シリーズ）から端を発し、世界的に爆発的な人気になったCups（カップス）を題材化したものである。カップがあればどこでも音楽活動ができる[26]。用意するものはプラスチックのコップのみであるが、感染防止対策の観点からは使い捨て手袋をするか、こまめに消毒する必要があるだろう。

筆者は、カップを用いて表現することの楽しさを実感しつつ協働して表現する子どもの育成を目指し、動画共有サイト（YouTube 等）から幼児期にふさわしい音楽表現活動を選んでみた。ここで2つの事例を紹介する。

一つ目のパフォーマンスは、チャイコフスキー作曲「くるみ割り人形」より〈トレパーク〉を用いたものである。この曲は2/4拍子のロシアの農民による踊りで力強く軽快なリズムが特徴的である。遊び方は、とても簡単である。車座に座り、保育者はゆっくり動きの手本「Clap - Clap - Hit - Hit - Hit （×2） - Pass - Pass（Hit では両指でコップを叩く）」を見せ、子どもに真似させる。音楽に合わせながら、学んだ動作を行い、中間部ではリズムを工夫して即興表現を入れることもできる。

二つ目のパフォーマンスは、コダーイ作曲の〈ウィーンの音楽時計〉を用いた活動である。この曲は、ABACADA coda のロンド形式となる軽やかで快活なメロディーが特徴的である。上記と同じく、保育者の動き「Clap - Clap - Hit - Hit - Hit - Clap - Pass」を子どもに真似させる。コップを用いた主題部 A の動きができたら、挿入部であるBCD ではコップを使わない身体表現を取り入れ、全員その動きを真似る。

こうした経験を踏まえ、「幼児と表現（音楽）」の授業では様々なリズムを工夫して自分たちのカップス・パフォーマンスをつくる活動を行う。実際、幼児教育コース学生対象の授業「音楽表現技術」にて試しにやってみたところ、メトロノーム練習用テンポ120～140程度の楽曲、ロンド形式の如く異なる旋律を挟みながら主題が繰り返される楽曲の方が適していることがわかった。

カップス・パフォーマンスでは、ただリズムをつなげて終わりではなく、試し、修正しながら自分の好みのリズムへと成長させていく創造のプロセスが大切[27]と言われる。モデルカリキュラム（2）の5）に照らしていうと、コップという素材の特性を理解し、「手拍子、叩く、擦る、パス」等の基礎的な技能を生かした幼児の表現活動に展開させることができる。保育者は子どもが動きを真似することに留まらず、自分なりに表現できるよう配慮しないといけないだろう。

Ⅳ　結論と考察

本研究は、新しい教職課程に基づいて設置される「領域に関する専門的事項」の一つである「幼児と表現（音楽）」の授業内容を検討することである。そこで、10の姿の視点から子どもの遊びと園生活を参与観察したが、室内における子どもの音楽表現活動が不足していることがわかった。幼稚園は時間割がある学校教育ではないため、教科ごとの比較は難しいが、歌唱活動はもとより様々な音楽的活動においても、これまで当たり前に行っていた授業の在り方が大きく変わっていることを目にした。さらに、新型コロナウイルス感染症対策としての音楽教育に関わる情報は、小中学校に比べて少ないのも事実である。

そこで、創意工夫ある質の高い教員養成課程科目として「幼児と表現（音楽）」の授業内容を検討する際は、コロナ時代を生きている子どもを念頭に指導上の工夫や配慮が必要であることに着想した。筆者は、「非移動系の動きを取り入れた鑑賞活動」と「楽しいカップス・パフォーマンス」の如く、人との間隔を空けながら身体の接触を伴わない音楽活動、つまり３密を避けてもできる表現活動を提案している。いずれも、幼児の豊かな感性と表現を育てる持続可能な音楽活動となることを目指している。

最後に、モデルカリキュラムでは、「領域に関する専門的事項」に関する科目と「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」の担当者が連携を図りながら扱う内容等を協議することが想定されている。高知大学教育学部の場合は、筆者が「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）に関する科目「表現（音楽）」と、「領域に関する専門的事項」に関する科目「幼児と表現（音楽）」を受け持つため、学習内容の系統性を踏まえたシラバスの作成や教員養成系学生の状況に合わせた授業づくりが可能となる。

したがって、新しい教職課程では「表現（音楽）」と「幼児と表現（音楽）」の連続性に基づいた学習活動が組み立てられる。すなわち、幼児の音楽表現の特性を理解し上で、子どもが何を感じ、どのように考え、どのように表現しようとしているのか、子ども理解を促し幼児の表現活動に興味・関心をもたせることを目指す。そのために、子どもの遊びや園生活における表現に関するエピソードや視聴覚資料を集め、豊かな感性と表現を支える保育者のあり方について考えていきたい。

幸い、モデルカリキュラムには「考えられる〈授業モデル〉」が示され、その全体目標のもとに、「幼児の感性と表現」と「様々な表現における基礎的な内容」の理解を深めている。加えて、具体的な授業内容や授業展開が示されているため、教職課程にて修得すべき資質・能力をどのように身につけるかをイメージすることができる。今後、考えられる〈授業モデル〉を手掛かりに具体的な保育内容を立案し、教職課程の質保証や保育者の資質能力の向上に寄与していきたい。

付記

本研究における保育実践とデータの使用については園児および保護者の承諾を得ている。

注および参考文献

1) 保育教諭養成課程研究会編（2017）『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～』萌文書林、p. 10

2) 同上書、p. 10

3) 同上書、p. 20

4) 入江慶太、荻野真知子、荻田聡子、岡田恵子、松本優作、後藤大輔（2018）「幼稚園教育要領改訂に伴う保育内容領域『健康』に求められる授業内容に関する一考察 ： 新しい教職課程におけるモデルカリキュラムとの比較を通して」、『川崎医療短期大学紀要』第38号、pp. 85-89

5) 藤田敦、川嵜道広、牧野治敏、中原久志、永田誠（2020）「幼児の環境への好奇心や探究心を育てる領域『環境』に関する保育内容の検討」、『大分大学教育学部研究紀要』41(2)、pp. 219-244

6) 片山美香、伊藤智里、馬場訓子（2020）「幼稚園教諭養成課程における領域『言葉』に関する専門的事項の授業内容の検討」、『岡山大学教師教育開発センター紀要』第10号、pp. 49-61

7) 中川智之、橋本勇人、入江慶太ほか（2018）「幼稚園教諭養成課程における「領域に関する専門的事項」に求められる授業内容に関する一考察 ： 保育内容領域「人間関係」及び「環境」のモデルカリキュラムを手がかりとして」、『川崎医療短期大学紀要』第38号、pp. 63-69

8) 奈良教育大学次世代教員養成センターの報告として、「教員養成における幼稚園５領域科目の内容構成（１）－『健康』に関わる教育内容研究知見に依拠して」、「教員養成における幼稚園５領域科目の内容構成（２）－『人間関係』に関わる教育内容研究知見に依拠して」、「教員養成における幼稚園５領域科目の内容構成（３）－『環境』に関わる教育内容研究知見に依拠して」、「教員養成にお

ける幼稚園５領域科目の内容構成（４）－『言葉』に関わる教育内容研究知見に依拠して」、「教員養成における幼稚園５領域科目の内容構成（５）－『表現』に関わる教育内容研究知見に依拠して」がある。

9) 平成29年告示の幼稚園教育要領では、幼稚園教育を通して資質・能力が育まれている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が具体的に示されている。それ(10の姿)は、健康な心と体、自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、言葉による伝え合い等がある。文部科学省、『幼稚園教育要領〈平成29年告示〉』フレーベル館、pp. ６－８

10) 塚本敏浩、廣田邦子（2020）「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿『豊かな感性と表現』をとらえた実践研究 ： A幼稚園5歳児『心を動かし楽しく表現する幼児の育成』を通して」『教育保育研究紀要』第6号、pp. 49-57

11) 安久津太一ほか（2019）「『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』働きかける幼児の自由遊びの観察と評価」『岡山県立大学教育研究紀要』第4巻第1号、pp. 11－20

12) 井口眞美（2020）「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を 保育の質向上に活かすために」実践女子大学『生活科学部紀要』第57号、pp. 19-36

13)「幼児の音楽表現」日本学校音楽教育実践学会編（2017）『音楽教育実践学事典』、音楽之友社、p. 248

14) 無藤隆監修、浜口順子編者代表（2018）、『新訂 事例で学ぶ保育内容〈領域〉表現』萌文書林、p. 114

15) 西村幸三郎「校長講話 昨年度からの新型コロナウイルス対策に翻弄された幼稚園現場の苦労」『週刊教育資料』、2020年4月20日号、pp. 12-13

16) 文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説』、フレーベル館、p. 7

17) 井口眞美（2020）、前掲書、pp. 19-36

18) 文部科学省（2018）、前掲書、p. 72

19) 保育教諭養成課程研究会編（2017）、前掲書、p. 28

20) 同上書、p. 148

21) 尾﨑公彦、青井則子、入江慶太、伊藤智里、伊達希久子、小合幾子（2018）「幼稚園教育要領改訂に伴う保育内容領域『表現』に求められる授業内容に関する考察 ： 新しい教職課程のモデルカリキュラムとの比較を通して」川崎医療短期大学紀要第33号、pp. 55-61

22)『教育音楽 小学版』「特集 緊急事態！どうするこれからの授業」、2020年６月号、音楽之友社、pp. 21-37

23) 文部科学省、「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～学校の新しい生活様式～2020. 9. 3 Ver. 4」（2020年11月30日閲覧）https://www.mext.go.jp/content/20200903-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf

24) この授業の原案はハワイ大学のChet-Yeng Loong氏の実践による（2020年11月27日閲覧）。筆者が「幼児と表現（音楽）」の授業として再構成した。https://www.punaewele-mele.org/generalmus/music/

25) Loong, C. and Lineburgh, N. (2000). Research in early childhood music: 1929-1999. Kodály Envoy, 26 (4), 24-29, 34.

26)『教育音楽 小学版』2020年８月号、音楽之友社、p. 55

27) 同上、p. 55